

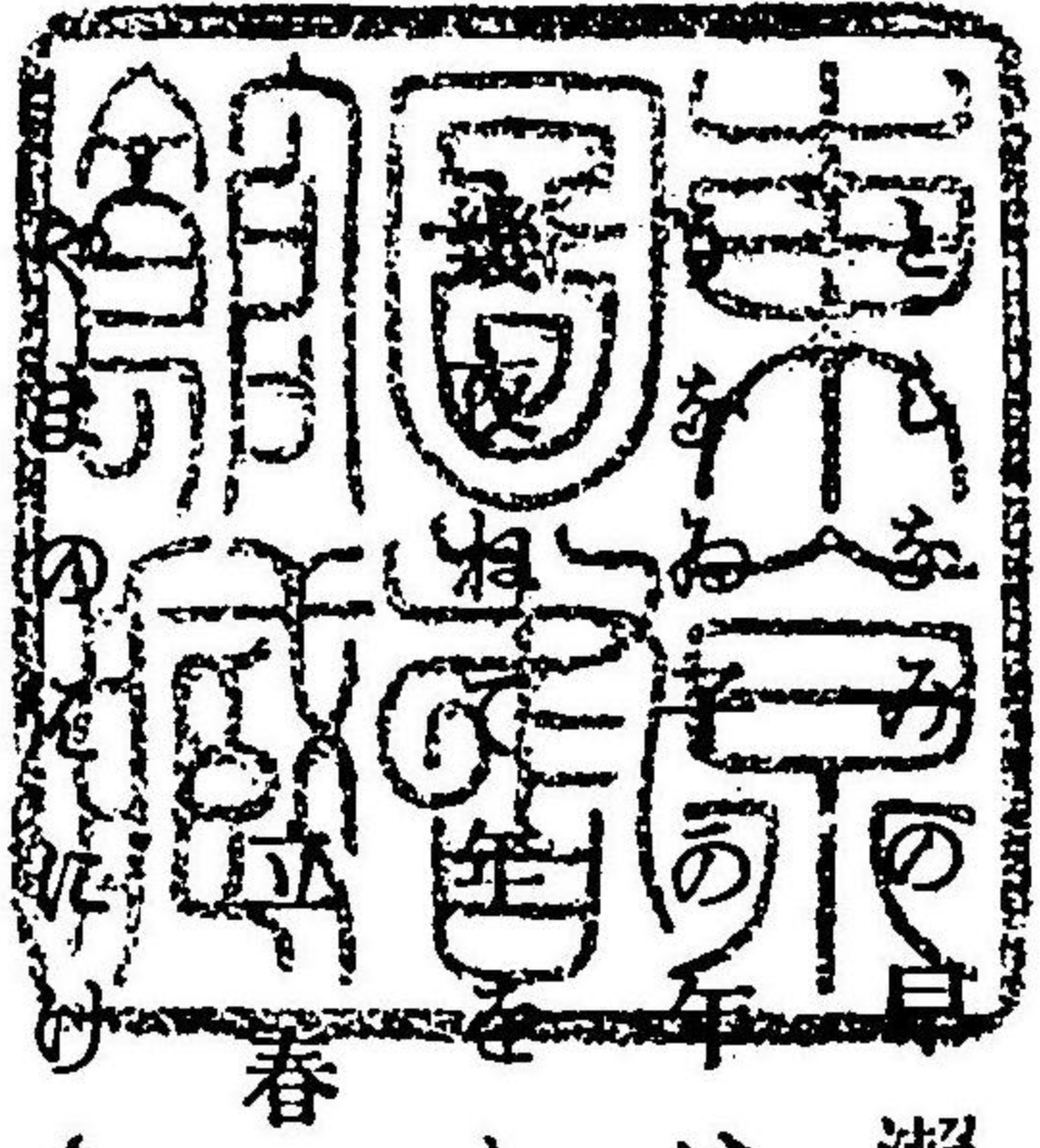
特22
906

松風集

年内立春

琉球國

宜野灣 朝保
護得久 朝置



瀬れうへに歸りきて吹ものをけき春は初風
ははじめの花衣たちぬそぬまに春風きふく
とるのを稚子のをまひをるまに春は來に免
春
ひかさ立初る霞こそ冬を春をのへたてありけき
ひかそす人の言葉も匂ふかあけを立初る春の来るに

元日

さと昇る日影長閑にわの君の千世に數をる春は來にけり

若水

若水を汲あけらきて我やとの古井もけさの嬉しかるらむ

初春見鶴

打そふくらたつれはをきに立にけり君のちとせは春は初風
あはとつたの翅の浪の打とする春こそ千世のそとめ也けき
姫小松ひかん心を引あへてたつにつとさのりて遊そん
あはたつの聲も小松に引きへて今年うちを重ねける哉

初春祝道

初春のいたらむかきり敷島の道のひらけぬ國やあはらむ

都早春

たちそめと霞のころもけさ見きの綾の都の大路ありけり
宮人も春のはとめはかさしにの言葉の花の外なかりけり

早春風

ものおとに吹あらしめて門松のうへあやすらふ春の初風

早春霞

れをのちも立ふはるか朝霞山のおとに春をさきひて
春き終といふとりやあて舊年をともに巻とて、立霞のあ

早春鶯

子日する野邊の小松も鶯の聲かひのきてひかぬありはり

春生梅柳中

青柳の糸にひかきて春かす垣は梅にのりはるのな
梅の香残柳の眉にうはらしてそ春のすかとの装むそめとる

春到管絃中

大君のちとの春をやそそふらんみとりのもとの糸竹は聲

每山有春

山といふ山はもとあり富士の糸の雪の上にもとつ霞をか
さゆ姫の霞は袖はほほほきて春に毛をさる山ありなり

每家有春

新よりき春残むのへてとれ中ふふりも宿あぐ成にはる哉
家々翫春

人皆の家のうちにてあす業も春の外なるものなかりけり

春色浮水

たきつ波くさくさるうへに歸りきてれとかふとてる春霞哉

霞添春光

野も山も霞籠とるけふともそをやかに春の色へ見えける

四十のなりける年の春

霞さへ春とささめてたつもの残猶ほをひぬるさの心のな

今年よりよせくる老の年波は末はうきせゆ流をすものあ

子日

けふといへへ引ぬ小松も引を筒心をのへふやりてける哉

雪中子日

降雪をいたく松はむく人の千世の姿残かねて見すらん

霞中子日

子日する小松の原の霞めを毛千世の隠を惣物ふさりける

子日祝

君のとれ千世れためし引むと生はん小松限りあき哉
限りなき御代の例もなあり免さても引む野へは小松を

若菜

初若菜つめの年をへはきへて心はのりそ老せりける
打むれて小松むれ小とあしものを若菜ふさへも心惑ひぬ
打むせと處女の袖の匂むをも若菜ふさへて摘としものな
長閑なる心なからふ所そひて摘と若菜の多くも有あ

名所若菜

春はほた淺野お出てつきたれを若菜の數は揃ひつるかな

山家若草

人とそぬ我山さとは若草の駒おふまるうきやなからん
世の人をいつとり爰にほ絲くらん垣ぬの薄萌ひておはり

残雪

朝日をす松はあたまお見ゆる哉つれなく残るみねは白雪
春きぬとうかれ心になきへこき高嶺の雪の花と見ゆらぬ

栽梅待鶯

我やせにうゑつる梅栽をりにて早くもひてよたおは鶯
梅はとな植てほつともあふをらんまゝ鶯の音つれもせぬ

鶯出谷

鶯の鳴あゑきけへのをけをも谷より出るもはふき有はる

曉鶯

鶯はねくらなかなかのそつ聲おせめてうれしき春は夢かな
明ゆかひ花おなかと有明は月におきたつうくむすは聲

朝鶯

人々は春のよろあひ聞よりもあした嬉しきうらひすの聲
鶯はねくらや花にまめはらん聲さへおほふ朝ほらけかあ

毎朝聞鶯

朝あけをな鳴ふるして毛新しく聞くゆるも此の鶯はあゑ

竹間鶯

ふしなから聞つるけさ此鶯の園生の竹は何とありあるむ
よかやせの竹の一むら鶯の聲はそや一となりおはるかな

雨中鶯

雨ふきの軒の木陰に遷りけりむとくと鳴しうくひすの聲
春雨のふりくらす日ハ鶯のおゝるも晴るむほをあからん
咲花の散もやせんとうくひすのあく涙をへ雨とふるん
をやみなく雨ハふれと毛鶯のあくね計のまめをせりけり

霞中鶯

春かすく立そめじより柳をく見えぬ敷そふうくひすの聲
つゝめを毛霞の袖おあまるかな春待えたるうくむすの聲

野鶯

春くまののおのまめ野と思ふんある顔も毛鶯のあく

馬上鶯

鶯はあく野邊ゆけのる駒もうかれあゝるに成おける哉
歸るさ此駒引とめて聞てまゝねくを求むるうくひすの聲

古寺鶯

うくひすの聲新しく聞くゆなり匂へる花のふる寺にして

春情在鶯

何々ためて春に心残なすも此の花の上なるうくむす此聲
鶯は聲の綾もておゝぬまの春はにいきもはえなかりなり

柳間黄鳥路

うくひすの聲にひのきて柳原ともにおつとふ我こゝ迄哉

ちる梅をむすむとめよと青柳はいとくりのへと鶯のな
或人に問ひき一日早春梅といふおとを

初春はきても君にいとそれすのかか返梅の匂ふへとや
窓下梅

ともし火の花さへ匂ふ心地とて窓は梅の香とえずも有哉
窓近く咲ぬる梅の空たきればかをるのこくらか残る也はり

逐年梅香

此うへのあふと思ひいとくくの春を集めて匂ふ梅哉

紅梅

色とりも香あそ何それといふ人に見せそやうめの花の紅
白雪にほのきいとやくれあおれふのき心に梅の咲くむ

月前梅

空にさへ梅の匂むやち終らん臈になりぬえるのとは月
とふ人の今宵の月にとひおなん明な梅の散もこきすき
鶯の花は絲くらの梅の枝に月のかけさへやとりけるのな

夜風告梅

鶯も夢路を出てたをるらん夜その何に梅か香そする

水邊梅

河津の梅の匂ひやかいつらん波の花さへ春めればはり
咲梅の影をい底に残しおきて匂むそかりをきき水をあ

梅薰枕

ぬえ玉の夢やうかれてさそひけん覺る枕に梅か香そする
春のよ梅は匂ひにとそれつゝ我手枕もあつかうきかあ
中々に寐られぬよと嬉しき枕に梅のかをるありけり

簷梅

朝手あふふをかめの水も匂ふかき軒端に梅の花咲くより
此とく軒端の梅は匂ひより外に春あきやせのうちかな

雨夜思梅花

見るか内ふ日も暮果て梅花雨にかくるくちこぎすれ
雨ぬき梅咲山にかとひつゝあゝ後もあめる春のよと哉

柳隨風

山にひく霞やねたく思ふらん風おのゝよるあをやきれ糸
みたるゝもとくるも風にまかするや輕き柳は心なるらん
打なむく柳は糸のあかりせの風のすかさを何に見せほし

月前柳

六田川いさよふ月れふねとれは柳のいとや綱手あるらん

ひまもなぐ風によぐるゝ青柳茂月になひくと月や思をむ

水邊柳

河水の流るゝかさに打なひきあせきにのゝる青柳れいと
うき草のたえまゝもひとつ色に結ひし糸の柳なりけり

朝柳

朝寐髪けつるやあてもとはおほり風に乱れし青柳のいと
あさけとく宿もあき野に打なむきもゆる煙の柳なりけり
春風の色もとせりに成にほり柳れいとにけさのかかりて

霞中柳

なつあしき柳は眉に打なむきねたくもかゝるはる霞かな
さほ姫の霞は袖をぬむそめいとほ垣ねれやあき也けり

隣家柳

我宿此春をいたむてあひくぐん垣のあまこ此青柳のいと
風ふけいとありのやあき我宿此池の底にも打あむきほ

霞山衣

春くまの山にきせんさほひめ此霞の衣おりいたすぐむ
つさ弓をるのとせむと山へ皆かずみの衣重ねきにけり

海邊霞

追手吹風をたのみて行船をいあてかすくの遠くひくぐん

朝霞

咲花をほつおもあけに匂えせて峯に棚引あをすくかあ

湖晚霞

夕まくま松の嵐を残し置てあすこめたりまあ此かぐ崎
あふへく八十の湊をつゝける霞の袖の廣くも有かな

山春雨

ふるおと毛山此霞やあくすぐんさも静なるるの雨かあ

山家春雨

との中此春残へたてし山さとの霞の雨とありにけるあ
妻木こるをれくむきも春雨に打あめりさる大原のさと

春月

むかりをへ花にゆほりて大空の月のおほるに成あける哉
世の人のうかれ心おにたるかな霞残したる春の夜のほれ
我門此やなきのうへにかゝりなり花より出し春此よ此月
さほ姫此あむる霞のうすものにほしみかねたる月此白玉

浦春月

波の音も打かすくそ聞ゆるなる明石のうぐ此春のとの月

あそれとて更につるかな吾妹子か袖のうぐの朧月夜残
汐風の吹井のうぐものせかにて月の光そかすみとてたる

幽栖 春月

世にすみし昔の影の見ゆるかな月のかすみハ朧なきを毛

柳間月 畫贊

青柳の糸は絶闇に見ゆる哉世につなかれぬ春の夜はほろ

故郷 春月

すくすくと昔の人のかけよりも朧につきれありにける哉

春江花月夜

あつかとき花の匂ひに霞けりやすの入江の春のよのつき
湊江のきしは櫻を見つるか舟にハ月と比りあひあして
入江あす棹のまつくと思ひしハ月にちりくる櫻ありけり

歸雁

をしと思ふとか心さへ引つれて春の雲井をのへる雁のね
夜をよめて立雁のねの撃す也ハのにをるけき越路成らん
玉つさあふぬ心もかりのねののへる翅あかけてける哉

曉歸雁

横雲も嶺あ別きてかりのねの行へをしとふこち社すれ

夜歸雁

羽風もて霞をはらへ春のよはおほる月夜あへる雁かね

霞中歸雁

かりのねの別れをまたふあちして歸る雲路に立霞かあ
つとさあハ戀の文をやかけつらん霞かくれあ歸る雁の糸

海邊歸雁

はるくと漕行船につらなりて波路長閑ふかへる雁のね
花もなき浦の筈を残し捨てや沖へはるのにかりれ行らん

歸雁驚夢

のりか糸れれきたつ聲に驚きてゆゑさへ花残見捨つる哉

歸雁消雲

心をき雲にも何る哉かりのねれ聲さへ遠く立かくして

二月のほこもりかゝ郭公残きゝて

かゝりあゝ我いつそりとなりあまゝ春れ雲井になく郭公

燕來

のりかねの行へ残慕ふ心をいつれて燕れかへり來にほり

簾外燕

つそくらめをすの外山に暮しけんけふも軒端に歸りける哉

雉子

若草をれのか妻とや思ふらん片野の雉子なかぬ日ゝな
片岡れ霞かくれに鳴雉ゝとなみにかゝるあゝちこそすき

風前蝶

蝶よ蝶よいつあに宿へ定むらん嵐れふか照花をかりけり
たか夢の行へなるらん朝風にさきとをささる園れあ蝶ゝ

曲水宴

みちとせの昔のはるにくとせめて今になかるゝもゝの盃
いにしへの面影さへものせあかゝ今ふなかるゝもゝの盃

待花

ちるあとのをしまれとより咲こともまたれ初けん山櫻花
櫻花けさゝいかにと山のを見れゝ昨日の雲のゝおして

咲花のさよりきかむと柴人にかへるさほさぬ夕暮をさ

雨中待花

山守のさよりも雨お絶おけり花咲ぬやとされおとひま

尋花日暮

花くんと思ひ入しを夕月の影こきおほへおれほこのまに
鶯おねくともとむる山かけおきても櫻お見えぬありけり

初花

きれと見しきのふの雲お雲にして誠お花き句ひそめたる
柴人のいひし言葉を志をりおてそつ花櫻見つるはふかお
花

花といふ花のたぐひおれほはれと櫻おかり残る吉野の山
櫻花おとに出てはさそそねを心おぬ日おあかりけり

花ちらす風あかりせお何こかれお心お爰に歸るさるほし

霞中花

玉おれのをすの内よりゆかおきお霞かくお櫻なりけり

盛花

此頃お雲もさくともひとつにて空さへ花の山とありにき
長き日も残しとおもひて暮すかな今を盛の花おけおして

馬上見花

花の上に心を分てやりおまお駒お輕けにありにほるかお
駒留て水かおほとも吉野河その花おおめおきさりけり

池邊花

池お面お織出す波おあやみおぬきお櫻の花にさりける

河上花

花見んといてと心へ大井川ふねより先おとほりはるかを

花下忘歸

咲花の絲にのへすすの歸ふとやすふ程に月も匂ひぬ

花下會友

櫻さく春はやまへに來てみまのれおと心の友のこにいて

花時心不靜

咲花れうへをのよきて花をおもふ人の心に風やふくふん

花の歌よめる中お

おてふにも鶯おともあふぬ身の春の日數を花にくふ一つ

月前落花

朧夜の月にも花の見ゆるかといつきの袖に散るゝりはれ

風前落花

あめて見るみねの梢お風ふけの花とゝもおもちる心のあ

關路落花

山のせみ散行とれへ關守も花をへ得こそとゝめさりけれ

旅人の袖おまをゝへとまりはりなこきの關は山さくは花

深山落花

散てゝも花へおもおく思ふふん惜む人なきみ山へおいて

落花浮水

昨日今日ちりて流るゝ花見れへ水の春あそをり也はれ

惜花

あさかりとかねてまゐるゝ櫻花うつろふ時の惜くも有哉

鶯も外おうつらすなりおはり明日へちるへき花陰おいて

雨中惜花

ふるまゝ、お花はうつろふ色見えて雨の盛のうらめしき哉

春田蛙

櫻ちる春の山田をきて見れはかゝつも花は上おなくあり
くれぬよりかすむ山田の夕月夜こゑも臙おあゝかゝつ哉

閑庭牡丹

色に香にとみとる花は咲しより我かゝきかも潤ひにけり

杜若

何けまきの水草交りに荇つらんけふはすくなき杜若のあ
垣津とと匂ふ澤邊へのら衣をるくきてそみるへかりなる

松下躑躅

夕日さへほゝの色の染ぐれて共おてゝせる松のあけ哉

山吹

行春をまそしと、めて匂ひけりよしは、河の山ふきの花
手折つゝいさ歸りなん又も來てみよともいそぬ山吹の花
人皆のあゝぬ心のかさなりて八重おさくらん山ふきの花

川山吹

よしは川底のかけさへかさなりて幾重おなりぬ山吹の花

松上藤

老松のうへおかゝりて藤の花初もとゆひの色やみすらん
行春を抜しむともあゝ藤は花何を松おはさきかゝるらん

水邊藤

もとゆひは昔の影を池水はかゝみおとす藤おみのとを

水上藤

みなそこお春をとゝめて咲おけり池の汀の藤なみのとを

春野

けふも又うかれ心を先たて、野邊に遊びお出てけるのみ

春枕

ぬえ玉の夢おさきつる初花のさむる枕のまとおちりつゝ、
妹の手をまきてぬるよのこゝちにて枕のまとお句ふ梅哉

春夢

ぬえ玉の夢を我世の春おいて尋ねのこそぬ花ののけのみ

春日懷友

故郷に花の木陰おまとおいて友も忘れをやおもひ出らん

暮春雨

をやみなく雨のふれとも暮て行春の志とも留らさり鳥
鶯も春にゆくへの志とさらん竹にそやいふ雨こそりいて

暮春鶯

今とてふる巢おかへる鶯に聲おそ春のゆくへありけれ
鶯のをいむお春にをほりなひ初音おくへき時やなぬらん

名所暮春

よいれ川ちりて流るゝ山吹の花こそ春のゆくへあるらぬ
うちむかふ鏡の山も暮て行春ののけをい見せぬありけり

春の暮あと野お出て

野も山もなつのけいきに成おほり心をかりお春の残りて

首夏雨

昨日今日みつ枝涼しく降雨の花のなあり残きゝ也けり

首夏藤

もとゆひに色の藤波夏とれはと世に春も戀いかりけり

山家首夏

世中をさぐにへとつるこゝちにて若葉をこそふ山は奥哉

首夏待郭公

ほとゝきす初聲高くもくしてよ心みれある花もちるへく

竹亭夏來

吹風ふ竹の一むら打をひき軒端はてこそあつひきおけき
我やとの竹の若葉を吹風にのへて涼しきあつあるもかな

更衣

花の色にきめし心のかへすいてのへたる物を衣ありけり
なつ衣年を隔てゝのへされし身にあれかたき物にさりける
人並に衣のかへてきたまともこゝろの猶も花きめにとて

新樹

こむ春は花のあとしおまざるらんみつ枝さしそふ庭櫻哉

新樹妨月

照月みささる若葉のくまかしの名もいととるゝ夏のよと哉

新樹風

散えてし花のあせとふあゝちにて若葉は上を吹あらし哉

新竹

生いてと園生は竹のちよの子の仰き見るまで成にける哉
若竹の垣の外まで生ぬるゝ千世はねさしのあまり成らん

卯花

衣のへ我をかりあはうの花はさける垣ねもまゝ重ねせり

夕卯花

心さへくれとさるらんうは花の光を月にまのへけるかを

月前卯花

てる月もおの影とや思ふらん庭白とへおさけるうの花
月影に隠るゝ見れぬと玉花やみそうつ木の光かりける

籬卯花

我宿此垣のうの花やみ夜にのれも月のこゝち社せめ
まのすたれまけの外山此面影のうの花垣に見ゆる頃か
この宿のうの花垣此下草のあつも雪間をいてぬなりけり
うの花の月此さかり此中のき隣のやみをへとてける哉

山家卯花

我山もと人あれとうの花の雪ふのあとをつけぬ也けり

待郭公

此夏の人つてとあもほととぎすされにの惜むおち社すれ

郭公何すのいか成んけふ迄の聞ぬ夜をのみおそへける哉
ほととぎす初音さやかお洩してよ山此と高く月も昇りぬ
一聲お明る物とのほととぎす待夜をまぬ人やひひけん

初聞郭公

ほととぎす待夜重絲とうのみ残も此一聲にはとつる哉
待とひてとる枕へおほととぎすもす初音の夢かと驚聞
人傳もきかて聞つるほととぎす何處の里も初音なるらん

郭公未遍

ほととぎす鳴とひすきを待人のなへのたとお毛及はさる覽
山むおの聲お何とせて子規なけをもいまたみとをさり免

獨聞郭公

獨寐の寐覺の空おぼとくきすあたら初音をもくしほる哉

月前郭公

大空のものなごかくに子規月れ何たりおととくあくらん

曉郭公

鶏の八聲もおれの一あるにまかるとやなく山ほとくきす
ほとくきす今一聲残さやかにと仰けおとくむあり明れ月

馬上郭公

家路おと我のる駒にむちうての郭公さへいそきほるかあ
ほとくきす雲井をるかにおひ行ん我のる駒を龍なごね共
のる駒の鈴の音にままとる哉おれひ絲に鳴山ほとくきす

郭公遍

いほれまに里なきにけん子規人ほてたにままきお聞しを

此頃ハ待人まれお成ぬらん山ほとくきすきのぬ夜もあし

早苗

梅雨れふるの山田お早苗とる田子の裳ハほすひほそあき

盧橘

行春をきのふとなふ、惜みけん花立となの有けるものを
をすれ内に花橘れ薫る夜ハ空ときものもかひなありけり

曉橘

明ぬとてむかしれ夢ハ歸りけりそあ橘れのをるまくらお

里橘

あの里に昔住し誰あらん花たちそあの香おもあられす

庭梅雨

庭の面お波立とれハ梅雨のふるをハ船のこしちあきすれ

山家梅雨

柴人のゆきのふ跡も絶おけり我山さと此さみとれのころ
梅雨の雨おこもりて世のうさも晴るひほなき山の奥のな

梅雨晴

さみとれの日敷を出て世中此ひろく成とるこち社すれ
さみとれ此雨そりかへ人皆の心もけふや晴わたるらん
さみとれの雨おあり一夫空此海もみとりお成おける哉

旅泊水鶏

故郷の夢れうき橋たえおけり船をたたくよその水鶏お
我のこと思ひしものを終夜おくや水鶏もうきねあるらん

夏月

みしか夜と空行月もいそくらん出て程なくかたふきお鳥

都夏月

加茂川此すゝみに出る宮人のたもせさやのにみゆる月哉
大せられ月の光も手にせりて結ふみあいの水のすゝし
蚊遣火のけふりまたぬ玉敷此都の月せすゝしかりける

山夏月

吹風おあひく若葉も見える迄すみのほりける山のとれ月

樹陰夏月

照月残毛すすまのまの多けれハ螢の影もそれおとせ思ふ

竹間夏月

すゝし毛竹の若葉残吹あへし風の見せとる夏れよの月
みしか夜の月れ光にさえるあ竹の心ハむあしけれと毛

船中夏月

けふも又月おとそきてかち枕うきねすゝく成にける哉
堀江川月れと船にいそけともなつとちある棹の音かな

雨中夏月

すゝくも光のうちなる雨をつきの桂のまつく成らん
照月の都の外やめくるらん影にさへぬぬふたちのあめ

螢

れく露にれれの光をくくへんと草むくことにとふ螢のな

水邊螢

螢とふみつのもとを尋來てもゆる光おすゝむよとかあ
せふ螢おのか影とやおもふらん水底てらすほりの光りを
吹とさる風さへ見えて池水れあやの上よりとふほたる哉
とふ螢何をおもひれ深けれの水底さへに毛えわたるらん

雨中瞿麥

あそれをも誰か見さらん降雨おぬれつゝとてる撫子れ花
撫子の花のちふさととのむらん庭れはゝぎのあめれ雫を

閑庭瞿麥

老人の世にいとそれぬむのと残のあらす顔なる撫子の花
なてとあの花お心そつゝけけるおくりむかへん人も忘れて

閑庭百合

とふ人もあくておもなくれもふらん葎の宿の姫ゆりれ花

蚊遣火

ささてとぬるま短き夏夜をいかにせととか蚊遣とく覽
春あつて月も朧に見ゆるのな賤かふせや小蚊やりとく頃
夏のお月もいふせく思ふらんかやる煙お晴くもりとて

稚子か蚊火に煙れいふせさもあつてぬるこそ羨まきけれ

晚蟬

夕立に木葉をわきて鳴蟬のあゑよりくる夕日のけのな
すみそめれ夕になれ松の葉に數とりけく蟬き鳴なる

氷室

あめれき冬をさへけて氷室守都の夏ふいそくけふのな
すゝさもあつて氷室や守るらん夏の至るぬ山陰にて

閨中扇

涼しくありてぬるほそなかりける夢も扇や拂ひ果けん
妹か手のたゆき計ふ何ふかれて夏の外ある閨れうちのを

夕立雲

天つ日れあそ隠れ夕立の雲の高ねへつれすものあ

海上夕立

きもこそ神の音さへ高からめなるとの沖の夕立のあめ
漕出る海士の釣舟こゝるせよ夕立すありたきほまやま

泉避暑

岩清水吾とそぬまふ夏のそやあ世の外水流りやりけん
立よれ涼ありけり山の井の水の底より秋やたつらん
夏をそへとなれ出るとちりて清水の上涼むころ哉

夕納涼

夏さへも夕日の影を誘ひきて山のあまとお成やいつらん

月下納涼

見るまゝ涼しく成ぬ久方の月のかつら秋やとるらん
風をのゝ涼くと何お思ひけん身おむ月の有けるものを

野納涼

すゝみふと野守の門ふきてとれハ秋の風をへ宿りける哉

水風涼

すゝいさをつゝむ袂ハ大井川なるゝ風のおせき也けり
待きてもいくらの袖ふかゝる覽みそきせぬきの鴨の川風

六月祓

みそき川なるゝ水の早けきハ罪を行へも見えぬ也けり

夏夢

短夜の夢とゝもなぐあふまゝの吾世長くも見えととる哉

立秋雨

秋とてハ心のくおも涼しきを雨をへけさハ誘ハせふけり
久のとの雲の高ねをかきくゝふる村雨ハ秋ハきふけり

初秋

萩の葉ハおとハきのふふかそゝねを衣手涼し秋や立ゝん
時とゝぬ松の葉に社まゝをけれかあゝあるへき秋の初風

初秋月

おき初ハ庭の草葉ハ露の上にとかなくやとる夕月のかけ
秋きぬとみのきそめとる三日月の鏡にうつるどか思ひ哉
きれふ今日小笹の上ふれく露の秋残見せとる月の影かな
秋きぬを遠山のとふかゝりけり眉とかりある三日月の影

初秋風

今朝ハとも吹來る風の身にそゝむこれや秋立そゝめ成覽
残れの葉ハ秋の初風音つきておとかに物そ悲しありける
秋風ハ吹初しより身にせゝむ紅葉も染すまおもなかねと

初秋雨

御被してはふひ残り暑さをもあふひ果たるけさの雨哉
秋きぬとあと一雨お驚きて早くも袖をぬふとつるかな
棚機（たなごり）の船出に明日の障るともあふてや雨おふり増るらん

海邊早秋

蟹の子かあことよれふる呼聲に何れぬ秋さへ誘ひきに免
まほふ舟秋残のせてや歸るらん汐風さむくありにける哉

残暑

御被せし願ひも神や受さふんたへぬ暑さはあふさり免
名のと立今年の秋のいつそり残先志るもの扇ありけり
夏今いつこの里に行つらんたへぬ暑さ残秋にゆつりて

七夕

あふをまち別きをなけくとあふとれ涙や天の川と成けむ
白雲残月のみ船おのせくるやたなとつめの衾あるらん
いのならん契りなれへの棚機の稀に逢夜のかへさる覽
あとり行跡こそ見えねむかよりあけて絶せぬ鵲のそり

雨中萩

物おもふ我袂までぬれにけり萩は葉にさき雨のふりか

閑庭萩

さひーさへ秋に限らぬ宿なれを身おむもれの萩の上風
あれそて一蓬の庭におひーのと萩の風おもとれける哉

月前草花

さ残一かた聲おあひき一萩の花今霄の月のつまと社なき

朝顔

うき秋の夕もあつて朝あ／＼るみほころへる朝かほの花

隣朝顔

朝顔も我かいまみやいとふらんけさ咲花の葉隠きにて
垣あえんとか残ゆるさん我宿の松おもゝれ朝顔のそあ

月前萩

萩の花すゝんとすきハ我袖に先うつりける月のあけあな

閑庭萩

を鹿とに妻とたのみてとひ來あん見る人もなき庭に秋萩

月前薄

月に社うのき出ハの花すゝきまねくとあるに我ハきに免

野薄

いのなれハあたのハ薄ほふ出てあるもあつぬも打招く覽

うきあをつつむ袂に似とる哉露けありける野へのを薄

行路薄

立てのくまねく薄ハ行人比ともぞ残いとふあハち社すれ

故郷薄

すみすてハ人や植けん垣ねなる尾花の袖ハ露けありけり
今さゝに誰ま絲くくハ花薄かへりきふける我残あすきて

月前女郎花

をみなへハたてる所にちよれと月人男ねとみもせする
月にこそうかき出ハかをみあへハ手折心ハ成にけるのあ

野女郎花

打招く尾花もあれとをくあへと立る片野ハ宿やのくまハ

水邊女郎花

賤のをの野中れ水残汲にきてまつ手折つるをこなへと哉
打まひく池のほとりの女郎花おの影をいつまと見る覽
故郷女郎花

思ひやる吾故郷のをこなへと今ハ野風をつまとなりけん
聞虫

秋れとつ草のたもとへせえけきと限りあき迄虫ぞ啼なる
閨のをえさして寐たきと枕へによたゝとひくる松虫の聲

月前虫

むさし野を月れ光あ分くれハむしれ聲さへかきりなき哉

夕虫

憂事をつゝみかねてやゆふへく尾花の袖に虫の鳴らん

雨中虫

鳴むしれ涙やあめあまゝるらん軒の雫もあかりけり
袖垣のほりさせとやきりくす雨の降夜ハ詫て鳴らん

行路虫

むさし野を分行袖の露けきハ鳴ある虫のなみたあるらん

虫聲非一

ほくくと品定めして聞へきをあまりに虫の乱きける哉

旅宿虫

鳴むしれ聲のゝ夜たゝ音つきて旅ハ秋ハ悲しありけき
夢路より行てきく社何ハれおれ吾ふるさとの松虫のこゑ

旅館聞虫

鳴虫のなみたやとにおきほらん草れ枕ハ露けかりけり

秋風

秋風の宿りやあゝおきたむらんおきふゝそよ庭のを薄
目に見えぬ秋といつこと尋ぬれはそとと答ふる萩は上風

閑居秋夕

人とそぬやと水のそ吹こゝちいて夕悲しき秋のあせかな
初雁

花すゝきたき招くかと思ひゝお雲井遙かに雁そきふける

月前雁

今霄くる雲井の雁に言問むとこよの月もかくやさぞけき
てる月の光のうちにくちむきてくる初雁の聲はさやけさ

風前雁

玉章もけさと嵐ふみさるらん雁の數さへとまれさりけり

關路雁

雲井とお雁も清水に影見えて今こそととれあふさあの關
雁のぬの雲路にまよふ聲す也空はてとさす關ならあくらふ

古渡秋霧

こく船もありやあゝやせとふそり霧立ととる隅田川哉

秋月入簾

語らそん友ならかくに玉とれの隙もる月れむつまゝき哉

十五夜

秋こそお秋の今霄とうたそれて光あとおも見ゆる月かな
いつよりも光さやのお見ゆる哉月も今霄や待わたりけん
よるあかゝ年もへなまゝかく計月れ光れさやけかりせん

都月

宮人の言の葉いのに匂ふらん花れみやこの秋のとれつき

海上月

和田つみの沖へとるあふ立波の花さへ見ゆる秋れよの月
松浦瀉かよふく月へもるあふれ山の端出るはしめ成らん
會友見月

燈火のほとおの外にやりて社今宵の月を見るへかりけれ
まをあして月あうとへる聲きけの共ふみちたる心也けり
各所月

住吉の神のみあけも見ゆるほて月れかゝみの澄るよと哉
夜鹿

枕へふ夜たゝ雄鹿れ聲す也吾をそれぬるあふちのこして
風前擣衣

吹風のきぬとの音をもてゆかゝ旅の夜寒や打かさぬらむ

隣擣衣

間近くも砧の音を聞ゆある冬もとありふありやとつらむ
寐覺して隣のきぬた聞時のわかうつよりも夜をむなる哉
中垣も秋のあひなと衣うつ音をへえこそ産たてさりはれ
里擣衣

海邊擣衣

月にさへ夜をむ我語るあふちして衣うつ也せらとあれ里
岩か絲によせ來る波も唐衣うほあふたくるあふち社すれ
故郷擣衣

山家擣衣

草枕たむ寐夜をむにありにけり吾家妻やとほもうつらむ
よひくに山分とほもうつ音れ絶す聞ゆるあふまきの里

妻木こるをのゝむまきにあらきひて暮ぬ程よりうは砧哉

待菊

白菊の花のちとせれ物あれはつ毛ひさしく成にける哉

籬菊

菊花ふりと籬おさけはあきいよく千世れ物と見ゆらめ
白きくの籬のもとに立よりて千世れ雪にぬれぬ日毛なと
老の浪よするもあらず白菊のにはふ籬茂るかみおして

朝敷王子の庭前の菊を

秋こと小咲あふためて菊花君とちとせもあほふへふあり

朝紅葉

明ゆけは朝日小匂ふ毛みち葉茂よるの錦と思ひはるかな

杜紅葉

中々に常盤の杜の毛みち葉はやく毛色お出にけるのな

水邊紅葉

影も猶くれなぬにして白河の名にハ毛みちれ移ささり鬼

池邊紅葉

かけうつる池の心ハ淺けきと毛みちれ色の深くも有かあ
ふしきれて池の鏡に打むあふ秋れとそひを春に見せハや
ももち葉ハ影さへ深く染てけり池の底にも霜やれくらん

雨後紅葉

吾山に又めぐりこよ村くきそめぬ梢もハまとのあれり
立出て雨の晴間お見つる哉きれふハそめぬ嶺の毛もち葉
ハさけふハももち狩せん村時雨過にハ山を山めぐりして

紅葉如醉

汲のそす圓居の外のみちまで酔の盛を見ゆるけふのち
紅葉霜

もくち葉を深くそめむと置霜の白きかちふも成にける哉
葛懸松

秋ことの色染のへてはたかつと千年を松にのりける哉
露霜にもみつる葛の色とまの松も花をくこちあそすれ

田中邦道ぬしをとひける夜庭のもくちをみて

燈火をのけて見れのみくち葉の錦の夜もあらわれぬ
ふりかゝる時雨に染しくれあおの深き君か心なりけり

九月九日悠然亭にて

菊のまと青葉あきとも盃にうかへる千世の替りさりけり
長月れけふのこと、おていさくまん南の山の明わたるまで

山家秋

ほおいて、招くを見れは山里の秋は尾花もさむとかる覽

山家秋深

宮人のえくひの中毛れしす、虫の聲もかれ行山のおくのあ

暮秋

野へお行山へに行て小男鹿のなけと毛秋の留りさりはり

鐘聲送秋

山寺の秋夜と、めともみちを誘ふは鐘のひき也はり
鐘の音を打ためりてき聞ゆある秋のかたみの露や置らん

初冬

うらのれと尾花の袖を吹風れをゆるや冬れとめ成らん

初冬時雨

きのふはふあくる、空の浮雲ハ秋と冬とのへさて也けり
冬きぬとあぐれの雲は立しより空の緑もうつろひにけり
時雨

木枯ハ誘えき果ともみち葉の跡をふものハあくれ也けり
足引ハ山のあらしにききおれて木葉をともに降あぐき哉
山時雨

山のはの松にかゝれる村とくれ晴ても音ハのこりなる哉
曉時雨

まためあき夢ハ跡とふこゝちして寐覺の窓に降あぐき哉
玉たれれをすの外山の横雲ハ打しられてそ立わかきゆく
旅時雨

晴間残もまたてゆかまゝ旅人の袖ハきくても打あぐれ筒

月前落葉

てる月ハいさよふ嶺の梢よりはあれか糸てもちる紅葉哉
紅葉にうつもれなあぐ足引の山路ハ月にあぐハれにけり

風前落葉

此朝けさゆるあぐの嬉しきハ落葉の塵をとおふ也けり
今とて嶺の紅葉残さそひは、あぐも色に出おける哉

谷落葉

紅葉のちりてあつまる谷のけや秋のかくきし所なるらん

落葉入簾

暮こても秋ハやとりや尋ぬらんをすれまとほる室の紅葉
窓ハ内ハ落葉のちるをゆるしハ乱れしをすれ心也けり

落葉無行路

落つもる木葉み道へうつもきて人の何とさへ枯しと為哉

人跡板橋霜

板橋残まのひみ誰のわとりけん霜比さやのふ跡を残れる

寒草

見る人の袖さへ寒く也おけり霜お枯ゆくまのゝをすゝき
夕霜比ふる野おすゝく虫の音のかるまをあるゝ篠のを薄
むせゝ野の篠のをすゝき冬枯て限りなき迄さゆる頃かな

氷初結

寒かりゝよその衾のうゝへにもとあてて結ふ池比薄らひ
池水のあやは氷のうすもの残織そめてよりたゞぬ也けり
朝手洗ふ小瓶の水の薄氷くたくとをときものふき有ける

冬月

此ころの空の海さへ氷るゝんゆるくまなき月の影のあ
かきくゝもまぐるゝ空を出しより冬籠りせぬ月比のけ哉
冬のよの月こそくまもあありけれ桂比枝も散やとつゝん
人皆の冬こそりする此あるゝ月も友あくおもふへゝあり
なつゝはゝ月のみ船比ゆゝみれゝ天の河原も氷ゝくゝん

寒月

かきくゝゝ降しゝ空残行月のかけゝ雪より寒けありけり
さゆる夜に月人男比かあれゝ雲比おすまをとなれ出けん
寒けれゝ霜とまあひて月のけのやとる袂を拂むつるかあ

夕千鳥

夕の岩うつ音おおとるきて遠さかり行村ちとりのをあ
あはれにも鳴こそかゝせ友千鳥なれも夕の悲ゝかるゝん

夕さきいあそての森れあかふに妻こむわひて千鳥鳴也

寒夜水鳥

かく計寒くもあるかを鳥の離をぬたにも臥うかるらん

河水鳥

山河の氷の床にぬるの毛のふすまの氷ののほそき也けり

湖上水鳥

ゆの計寒き夜とこの浦あらん寐覺かちにもをいそ鳴ある

小夜更て飛とつ鴨の聲すあり朝つ値船やあきかへるらん

埋火

さはかりの寒さならねと馴々てえ毛はあさきぬ桐火桶哉

閑居埋火

思ふとちとそすと毛より埋火の外に心のあふの社何ふめ

ふみも見ぬ窓のうちふの埋火は螢とかりを何つめける哉

爐邊閑談

たぐ炭の櫻木あれやおもふとち語る言葉は花の香そする

埋火の白くなるまでおもふとち赤き心残かさるよそかあ

汲酒おあゝるのうちもうち霞み言は葉おほふ埋火の毛を

霞

神無月とくきし雨やこほりけんなほ定めなくふる霞かあ

初雪

初雪のふれるあいたと朝なく見なれし山も珍しくき哉

冬枯の櫻のえたおかゝりけり花のと見ゆるけさの初ゆき

山さと残寂しとのみも思ひしあ初雪をまらぬ也けり

誰里もまのぬすたれにあかるらんけを面白くふきる初雪

月前雪

てる月ふ光をそへて白雪は積るよるのよるといふなり

山雪

玉くしけ明行きらば風をえてかゝみは山おつもる雪かき
中々ふ常ふ變々ぬ富士のねこの大雪もまゝすや有らん
雪ふれと山は端をきに花咲て冬かきしらぬけしき也けり

松雪

松よりもあらしの先ふ埋もれて心はまゝふつもる雪かき
さもあきといたとも雪は積るゝ免雲井に近きみねは松原

海邊雪

蚕の子のあとのふる呼聲もけさのみ雪に埋むけり
岩のねは松のゆきに埋れて海のみをりきときは也ける

あふ磯のあらし松原あらしさへ埋み果てもつもる雪かき
わさつみの洲先につもる白雪の汐のひるまそ命なりける

名所雪

名所のりを埋みのこして此朝け青ねの峯につもる雪をか

閑居雪

かくれかにつもれる雪のうれしき心の塵も埋む也けり

雪中客來

ふりそへて訪くる人の心を埋み残してつもるゆきのあ
我門ふ雪うちはらふ聲すあり立いて見と人や來つらん

雪中鷹狩

まゝふの鷹とひとつに見ゆる哉雪はふる野の狩人袖
いとつかに狩暮し免かり衣の袖に得たるは雪のふりて

獨釣寒江雪

雪ふきとこき出にけりあま小船ひせり心のまゝ此入江の
雪ふれの鳥も寐くゞにまもり江の芦間を出るあま此釣舟

神樂

なへてふのことなる琴に吹笛の聲おもゝるき神遊ひのあ

閑居冬

おのつかう人目のきふし我宿の落葉はらふも嵐ありけり
朝夕にえもはあされぬ埋火の外に友なきふゆこもりかな

冬夕待人

おもふとち暮果ぬまふ訪來かんをすれ外山に初ゆきを降

早梅

春をのゝ待かてにするをさあ子の心お似とる梅れとつ花

梅告春近

明日とゝむ春れまうけもおこたりし心にも似ぬ梅の初花

歳暮

はかあくてゆく年波も山川の水とこほりて流れさうなん
限りあうん年とは誰も知あかう行むとすれは留むをす也
行年の惜むに留るものあうと世お老人とあらととせ思ふ
玉ほあ道の行人の何しなみもささくを見ゆる年れ暮かな

閑居歳暮

我宿を鬼より先にとふ人をやうひそてたるあち社すれ

歳暮酒

近くなる春茂むかへてくむ酒おほつうちあすむ我心のあ

除夜

新玉比せしとなり成にけり今宵ひと夜残中垣わいて

初戀

一目見し人を思ひ比さみと河末のいかなるうき瀬成らん
大のたれ戀せぬ人比數残しもいつきはやかてぬる、袖哉

忍戀

顯はきて世にうたえれん苦しきも忍ふ思ひに猶しか免やも

不逢戀

いかにせんよれともよきと片糸のあそて終中絶ぬへさる

曉待戀

朝のほの花にかおちて松比戸残明かた迄も明てけるかを
偽にありぬこころ残せぬんとや曉あふしまつあふくらん

月前待戀

人をおみ松のとほそにほをさくも思えぬ月の影をさしとる
月まつと人おのいひし偽をまことにあてとるぬ君かを

待不來戀

今宵しも又いさつと松の戸を明とるまゝも明しつる哉

逢戀

ほらかりし昔の袖わうきしを包みかへても何ふ今宵哉

夢逢戀

現なき吾世ありせし中々おそひ寐の夢のさめさくましを
いあわれの現にあふぬまかれさへ鶏比八聲の驚かすらん

別戀

曉のわおれをつくる鶏あふまると逢おとも鳴てまかせよ

欲絶戀

たえぬへき朽木の橋の危ふくも我中川にありけるかを
名立戀

苦しくも人目我何に忍ひけんさてもう其名に立ける物を
いあなれに閨の板間に細けれと洩る憂名に世に満ぬらん
互恨戀

君とわの思ふ中川波とてわたりかともみあうち恨とつゝ
馬上戀

のる駒に急ぐかよにも面影に追すかひてそ離れさりける
不知在所戀

恨とたに吹て傳へむ風毛のあつれあき人のゆくへ尋ねて
ありかよへ君の心の秋霧の立かゝりてやまられさるらん
精進戀

いのにせんこゝろの水のます鏡磨けはうつる人のおも影
戀草の生さふ沼の蓮葉にありにたまぬ毛れと一毛なり

疑真偽戀

いあみせん偽こと偽ふたすちの戀の山路に明とくゝりて
言の葉に花の誠にいづそりのねとより咲物あや有らん

戀妨學問

なけきの戀の山路にこり積て月に桂の残るへきあに
中々に戀のやみをやてらすらん窓に集めし雪もほたる毛

夕戀

人こふる心れやみにいそをきて暮ゆく空のこゝち社すれ
此ころの妹のまかきれ夕顔の花もつれなく見ゆる也けり

老戀

とと波れつものりの浦をこく船に戀の重荷をのせてける哉

旅戀

さすき草かりて枕のむすこまゝ戀とさるへく

冬夜戀

袖おれく露もや霜となりぬらん片とく夜とれ寒くも有哉
ひざり寐をともなふ聞れ埋火に毛えくらへする我思ひ哉
妻戸おそよその霰ふうたれしあつくる物心なりけり

歳暮戀

此としもとや暮はてゝ老なゝん戀の心もおとろへぬへく
年あとの流れれ末にこきいてと戀れ小舟そ行へまられぬ

寄月戀

あそれとや月を見るらん零々に我影あり我にそひつゝ

面あぐも思ひやすらん月にのみけふもととるゝ聞れ木枕

寄春月戀

春のよの月の鏡れくもらすの影とに君の見るへきものを
人あふる心れやみにくらふれに朧月夜もさやけかりはり

寄雪戀

妹の來る道れ上にもさるらん待夜あまたに積る雪のな

寄木枯戀

つき毛なき人に見せそや木枯の心のまゝに誘ふあのを
今こんと契りし人のことのも空ふや吹しこかすしれ風

寄山戀

山彦のあたへとにせぬ奥山になけきのところ戀もする哉
我戀の積るかひこそなありけき塵とに山とあるてふ物を

寄花戀

花をのゝあたなる物とおもひし人の心をたぬ也けり

寄鳥戀

中々ふやも危からずの我あふ鳴て君にもたられなましを

寄竹戀

うき人我こふる夕の吹風ふねたくも竹のうちなひきつゝ
けふも又妹のまのきの竹の葉の露に袂をぬらすのゝの

寄車戀

いのにせん歎き積たる柴くるは志しも君に何そ社あふめ
さひぬれに我身牛にも成てさ君のくるまを牽んとそ思ふ

寄船戀

君と我盃の身ならに船寄てむやひするよも何しまし物を

柴船の志しも君にあとすしてこかれはて行戀もする哉

寄子日戀

子日すと袖に小松ふふれしものと心は妹のあゝるをそひく
子日せと後そつれなき何とぬ日の久しかれと祈りさりとを

寄衣戀

秋風お吹のへさるゝ衣手におく白露れまけくもあるかな

嶺上雲

暮ゆのゝ又いつあとのやとしましけさ立出る峯れまゝ雲

關路雲

はあ絲路の空まてとさす關あらん明てそ雲も立渡りける
關の戸の雲のとさしおまのせつゝ守る人なきあふ坂の山
あゝかられ關を月毛の駒のり雲と共にこえてける哉

海上曉雲

波の上にかげ見え初て二見かゝ明ゆく空ふ雲そたよふ
明ぬとて波路をわたる浮雲は宿り一峯のいつこあるらん

禱雨

祈るとて涙おちつる袖の上につゝみあへなん雨の恵とを

雨中待人

ふる雨ふ淵より深くなりけりといひこん人をこふる心は

雨中燈

ほれくと雨のふきとも燈火は花に春めく窓のうちあな

喜雨

諸人の心の水は小田よりもまつみちぬらん雨のめくみち

山家雨

山の井をかきにあらつゝ降雨かなとの心はすゝ増るらん

富士

大空のものとや空も思ふらん雲おにたてるふとの志を山
ふとれ絲をふりさけ見れは白雲の上お毛雪は積る也けり
國といふ國の空まで高き名はあはれわさるふとれ芝山

海路日暮

行舟のまたのみさき残めくるまは波おひをよへ夕月は影
あかねさす夕日かけるふ山の端は出と港のあたり成らん

扁舟暮歸

漕かへるあまの小舟や迷ふらん志をいそよへ夕月の影
夕けたく煙やおきお見えつらん歸るをいそくあまの釣舟

水石契久

動きあき御世を心のいそねおかけてたえせぬ瀧の白糸

山中瀧

足引れ山の心もうこらまてとゝるき落るたきのれをのあ

田家眺望

打とする稻葉の波へ海とほき田中のさとれ見るめ也けり
門田もるかゝの弓におとゆきて遠さかり行村すゝめ哉

獨懷舊

さまくの花の遊ひの有りし世を語る人ぞへあくら成に覺
披書知古

うきくもふみの林に分入てむかえれ人おあひふける哉
よさの海の天れ橋立ふとみれへ神れみ何とへ今も残れり
飛鳥れふみ残りたる跡を我むかへおかよふつとを也けり

古寺嵐

住人の心れちりをはらひつゝ何と吹ありをえつせの山

隣家鶏

隣にいたるぬ夢をふとつ鳥いのにりての驚かすらん
中垣をけふもこえ來て我宿の鳥とむほきて遊ふとりあな
空ゆさへ近きとありの庭つ鳥まとき明ぬと告ごさるらん

松竹梅れ賛

松竹をちとせの友とちきり置いて匂ひあをなる花へこの花

松

をきこなる松こそ友となりふけれ花も紅葉も一時おいて
遍照寺門前の松を

古寺の門おいたをのうゑつらん世に捨らぬ松の老木を

松色映水

松陰に流るゝ水残汲ときも千世も手にとるこゝち社すれ

松有歡聲

萬代の聲こそたのく聞ゆなれ吹もたゆむなみねのまつ風

薄暮松風

夕まくき立かきなりゝ浮雲のうちにあくるゝ峯のまつ風

旅宿松風

立出ん旅のやとりに時雨のとまそゝうとかふ峯のまつ風

はこね路の夢もゆるさす成にけりまつの嵐を關守ふゝて

竹

さも社へ千世も榮ゆく竹あゝぬ霜ふも色の變らさりけり

千世とのみ何くれ竹をたふらんふゝも心も頼もゝき哉

禁中竹

起ふゝお君の八千代を算へはゝみそゝれもとに立る竹哉

晴天鶴

晴渡るあゝとの空へ何ゝたつの翹をかりれ雲たにもあゝ

羽風もてはゝひそてとる白雲ふ立あゝり行天のたつむゝ

暮林鳥

打たす松のそやゝの村をりれ聲みくれ行あゝち社すれ

ふくるふの聲ものすあく聞ゆあり暮る岡邊れ杉のむゝ立

吾やをれ片山そやゝけふも又ねくゝ求むる鳥のゝにゝて

隠士出山

人へ皆世に出えてゝ吾山の雲のとさゝもあひなかりけり

を茂鹿にすみか譲りて出ゝよりかへりみられ終山の奥哉

眼鏡

心をはてらとかねとる目かね哉文字は姿はさやかあれ共

書机

ふみ分てつくゑれ島茂来て見れは昔れ人のすみの也けり
文机の上こそす峯はなかりけりあたと國への果も見えつゝ

上れ御馬免とるゝ我拜み奉りて
かゝこくもめさるゝ駒は足並は君の千年は數やせるらん
あまくらへ

中々おこゝろの駒はこほよりも人れ先おをきほひ行らん

崎山別宮八景

六有齋琴聲

雲の上お調へあけとる琴のねの嬉とまふとの絶ぬみよ哉

登嘯臺晚眺

夕なきお見えこそととれ萬代の御垣となりー沖つーま山

窓前脩竹

實をはまん鳥も鳴へき御階お竹の緑もことささおいて

鑑池遊魚

池水おたゝよふ雲のうろくつの龍おなるまの栖ありけり

池塘荷花

置あまる恵みの露にみかゝれて薫るも清一池のそちすそ

東籬秋菊

と園生の菊はさかりの籬お南のほしもかけやとすらん

樹下箭道

吹渡る木の下風ものとおてひくらや弓絃の音れさやけさ

曲徑丹楓

みそのふのとみちふたてる嬉しきを色ふ出たる若楓のあ
大學寮に掛床ふ五月中無暑氣と有るを題ふて
學生共へ作のこしける

夏は日は影もよそふや過すらん文のこやし分入りより

寄月述懷

世中をたとりかちふもわさる哉月は光のさや西あれとも
てる月の鏡にかけの見えもせの心みのぬ人やあふらん
おもしるき月ふなりても敷島の道の外ふの行のともあし

寄朝顔述懷

徒ふなるへむ身を朝あくわふふ似たり朝顔のこあ

往事如夢

夢とのとうきも歎きも成とて、現なきよそ嬉しありける
おもひ出と頼みし花の遊ひさへ今こてふれ夢と成にき

世路如夢

定めなき事はかりして中々に夢なきよれあしち社すれ
かしこくもこの東宮の君神山老翁か家にれは
ん何そひかてふにならせ給ひてくさくの賜物
なを有けるよし承りてよみてつかしたる

さし渡す朝日の影のさやあにも千世の榮の見えにける哉
おきあまる恵みは露に老松の千世はみせりの色を増れる
それ贈物の扇にかきてよとあるか

萬代ふ吹とさるらんみめくみは風を袂かつむきみのあ

幸逢太平代

大御代お生れ一たにもうれしき残月と花とも盛あるかな
中々お願ふ事なき御代お祈ひて喜ひさへもまらぬ也けり
羽地朝愛按司の静観亭おて

海山も見ゆるかきりの静あるまゝのまめの内お社あれ
むのひの松山を

萬代も庵とあひひてたつものゝむのひお見ゆる松お村立
かさかひけるうち月東山おのほる

思ふとちかたる心のさやけさふさきおれ出る山のその月
さゝいてまとおの敷にありおけり共お待つる有明お月

玉川王子お別荘の十二勝

春風入簾

玉とれのひまもる風おまらけけり君お千年の春立ぬとい

樹陰納涼

吹風も夏をやよきて宿るらん天津日おけのもらぬ木陰お

對菊延齡

ゆるくお菊お咲とも君おへむ千世の外おる花おあり鬼

爐邊閑談

圓居する火桶おもと春めきぬ語るお花おことあらぬ共

社壇接雲

神垣お雲井のよきお見ゆきとも守る心おへとてやある

西森松林

打むかふ杜お松おら遠けれとさやのお見ゆる千世お色哉

民田争耕

落さるも拾おぬみよお糸差を植んを急く小田お益良男

瀬江諸船

百船の入江やすけお見ゆるのを波に上にも道何らん世ハ

平坂行人

老人お重荷もとせぬ世おあれハ坂も平々と行通ふあり

農夫晩歌

夕まくれ稲葉に浪ハ見えねとも聲を帆おあけて颯ふ健男

海邊眺望

空に海お浪路の末やかよふらん見る心さへかきりなき哉

夕陽映山

紅お匂へる見れハ日影をすゆふへそ山ハさのりありける

母上六十一の賀お寄松祝

たふちねの親に千年をまつといふ松の限りハ親ハかり免

美人彈琴

たこやめの琴の下樋おかきなるす心は水は音はさやけさ
なつかしき妹か手なれのつま琴にねさくも通ふ嶺の松風

善平某か祖母の九十五の賀にまのりけるに手つ
のら酌とりて壽命を何やかれよといえれけるを
かたしけなみて

かしこくも波てやふる、盃の上おも千世に影ハうつれり
くみおえずこの盃ハ三千年おあるてふも、此年あるらん
米須秀經翁八十八の賀にねのきもひとあはほき
てよとあるに

松

枝葉さへかねて千年の色見えて惠くは露のかゝる老まつ

行末は千世をねもへん年ふりし松も小松のまゝち社すれ

竹

ふし毎小君かよそひや籠つらん千尋の竹はなりふける哉
此君と共に契りて此君もおきふしやすく千世をへあはし

梅

年ごとに咲けりためて梅花君か八千代のそるやまつらん
やちとへて八重咲梅へ九重の雲の上までふほひけるのを

又上のもあしひことふて衣帯なとたまそりし
よし承りてとりあへす

やそつゝきうみのこと迄ねほふへく戴く袖の裕かある哉
嬉しさを包みなかにちともへむけふ賜りしみそは袂は
繰返しちよをつのねて此帯は長くも御世につかへませ君

富川盛奎の母は七十三の賀ふ

いか計樂しかるらん垂乳絲のちよのみあけは歌ひ遊ひて
たらちねの親のためふと祈る子の心あ兼て見ゆる千世哉

川平朝範の母の七十賀寄鶴祝

嬉しけふ雲井のたつもわたる也君の千年を歌ひあけつゝ

まゝ寄松祝

岩のねふみとりそひ行松の葉の數もまゝきぬ君の千代哉

十五夜寄月祝

人皆の願ひもみちしみよなれは月は光もことさかして
ねなし日川平朝範三司官あかりはほきるを

月見おと出ふしおれを君およりこの願ひさへ満餘りは
高ねゆくこの枝折とそ成おける君の後れて昇りされとも

某の子息の婚禮を祝して

諸ともおと一武隈の松かけに翼あふへてたつそ一めとる
萬代のそ一めといそふ盃のあれれすゑのいひのふ久一き

當間嗣厚のやと一野山のなの幾いとひろ一むか
ひれ松山なとさあゆその庭れ物とみゆ

遙ふも野末ふ見ゆる山松れ千代さへ一めれうちふ社なれ
何の一のもとよりおこせたる小箱を開きて見るふ

梅の露といふ鬘附なりけき一讀てつものそ一ける
浦島の子れ箱なふぬこの箱のあけて嬉一き梅の香きする

朝紀公ことひ王子號を給そり攝政お任せふれけ
るを祝ひ奉りて

たゝ一くも心れ駒をのる君のくふの山もたかく昇りぬ

漢那庸森の山奉行おなりて廻見お出と一んと一
ける時歌こへるふ

君の爲深き心れねさ一より生たつ木々のかきりや一ある
心せよ君の恵みおれのつからさかゆく柩の宮木おれとも

島津某ぬ一異國れ守衛として三ぞせの間こか沖
繩お在勤一けるかおと一やよひの頃薩摩の故郷
へかへらきけるふ

わとつとの沖によせくるゆら波も打やとふきて歸る君哉
みそら行雁金あふら歸りても秋のふたゝひ見るへき物を
高橋ぬ一のかへらきけるを

萬代に名をいせゝめてとゝまらぬ君の船出の惜らも有哉
ととつとの海といつきの深からむ君に別るゝけふの心と

久米邨純清のまつまのふるさとへ歸るせんけ
る日夏別といふことを

歸らんおまかゝを鳴て郭公あぬきみにもすゝめける哉
別路を残りむ袂の梅雨のそれてはちこそぬきまきりけき
あてゝこの花咲やを立出てこゝろつよくも歸るきみ哉
まつまへきたる人の馬のそむけお

君のさめ心つゝの旅おれ守るぬ神のあらしとぞ思ふ

國場朝張のふるさとへ渡る秋別といふことを

唐錦きて歸るらんれもかけ残まは秋山の見せてけるかな

佐渡山九十翁の手はかゝとちぬひたる衣とて我
とゝかゝ二人お贈るをける残かゝとけおみて

うれしくも千世に衣残葵草二葉のうへに掛けてけるかあ

萬代にこえむ翅を得たるのな蓬のたまのつるの毛ころ毛
玉の緒の長きとあをけふより君あきせとる袖に包まん

八田翁の七十賀に寄桃祝

わかやとの桃の花をへ君のへん千世の林となりける哉
司あけを給へるを

位山なほのほり行高ねまで見えこそわとれ道はひかりに
御恩を君かうけとる嬉とさひの袖にさへつゝみ餘りて

寄山祝

限りなき君の齡のためとに動かぬ山きひらへかりける

寄道祝

わかぬ浦に満くるまほに彌増お榮えさかゆる言の葉は道
きな人の心そみかく玉ほこのみちある御代のれほ御光お

常感聖恩敷

人々なの心は水やみちぬらん君のめくみの露のとつくみ
まけりあふ深谷かくれの草葉迄てり社ととれ天津日の影
御恵の露の積りとふちなれはうき瀬を渡る人やなからん

夏祝

思ふとちすゝみ所お打出てあそひのとする御代おも有哉
大御代お仕へん道を急ぐお明をすきよも嬉しかりけり

冬祝

君の代残をへん八千世を答へけり浦の千鳥お占せ正とき

寄旅祝

人やりの旅の道とりのほり行末はくろおの高ねなすや
師の大人大學寮講官おなり給へるよろおひお寄酒

祝といふことを

都まていさまひ出む思ふとちけふのまとおの酒を捧けて

寄野祝

名もまらぬ野邊の小草の末葉迄君の恵とれ露をかゝれる
むと野のまこの草枯果て神代の春立あへりける
神山庸榮の田舎の下知役おなりて下りけるお富
士の繪お歌乞けるに

燈下夜話

高けれと富士の麓のかとけきへ千世萬世も動あさりけり
君の爲民を思ふふのねの麓のかときことそりをしれ
れもふとち語る言葉お燈火の花をへおほふこち社すれ

曉遠情

ふしは絲の雪見ふたちし老人を曉さむくれもひやりは、
月前燈

そむのれてたゝ徒らふもえふけり月すむよその窓の燈火
野亭夕景

夕けたくけふりを見てやあけまきの牛引つきて立歸る覽
夕月の影にもまゝしとそれけり人へ歸りし野邊の庵りを
人々と終夜酒を吞て

諸ともふふのき心をくむとき酒の流れもかきりなき哉
日本武尊

玉の緒へあぐれと共お消しかとその名へ高し醒の井の水
まつろそぬ青人草をなきすてゝ劔おまさる君のをこゝろ
むのひ火の煙をたてしれもあけを仰けへ高し天のむら雲

源氏物語は桐壺は卷

桐は葉は上におきつる白露は光をたまとかりにけるかあ
葵をそ初もせゆひにかけとれとこゝろそなひく藤浪は花
久米島ある上江洲翁の手製は茶ありをておくり
とるに

こは春も木のめえるく薫りきて千世を調ふる軒は松風
春こそははまんこのめを枝折にて千年は坂も安く越らん
老人の心は中のにほひまで木のめえるくくみて社しれ

大原女

つま木をいれ我かそん初紅葉明日へもてこよ花の都お
折そへしつま木のうへの初紅葉妹の心はいろやそめけん
ある人の追善に歌をみてよとあるか

まぢかくも昔にかけに見ゆる哉まこを人の鏡ありけり

香川大人の畫像

君をくひ下す筏士いふふて本の道ふのこきかへるへき
さやのふも紀比遠山に見ゆる哉君のひらきみちの光ふ

香川翁の忌に寄藤懷舊

いふへをまのふ涙の雫さへひまふかゝる藤浪のこを
あき跡の松ふ懸りて藤の花残るやれののみさをあるらん

神祇

いあてかく言の葉草のさかゆへき神の惠の露なありせの
ちとやふる神の神代の心もて國を守るそたふとかりける

火吹達摩

雪の中お訪來る人をあそれとや火桶の火を吹起すらん

定家卿一字題をひるひとりてよめる四季の長歌

梓弓春の霞を曳つれて出て鳴つる鶯の聲をひらけし梅の
花見てもあかねのそのおほひ袖ふうつて青柳のいとわ
ひのれて野お山ふうのを遊せん折をえてをれる藤ふ長き
日のくるゝもまゝて白雲のかゝる高嶺の山櫻咲ひ又咲桃
の花もゝよるこひの心ふの何のほらさも梨の花ちるぬ程
ふと打そふち雉子うたへうとひつゝあかる雲雀の雲井
より歸ると見れぬ蛙鳴川のつゝみのすゝれ草咲も珍らし
花むろろいく重かさねてきの上お八重の花咲山吹のいと
ぬ色あていそつゝあかき心のゆかりとてなひきかゝれ
る藤の花春のなこり残をむまふ夏の日おけお打むのふ
葵かさして神山おのほりくゝて郭公初音待えて歸るその

空もくもりてをみよれの日敷ふりつゝをひよくも水鶏鳴
あるやこの夜を月おなゝる卯の花の白き扇の涼けけ
蓮おほへる池見れぬ泉流れて底清み影をうつしてとふ螢
鳴てもえつゝなく蟬の聲のまきりお待とひ秋をむのへ
て吹風の萩の上葉お音すれぬ萩の錦をうち重ね露けあり
ける花薄まねく袂やおほふらん雁も來おけり鹿も鳴虫の
聲々あそれとて霧のまのきいたてとれと月にくまなくさ
やおめて鶉なく野おうかき出さけぬほろくをひ立ぬ鳴
の羽音の白菊の花おまさると見一人の心おのくもそめ出
す葛や紅葉のかき錦きつゝかへり秋のあをつきて冬お
の初時雨ふりみふくすみお霜のさゆるあいたの薄氷く
たく露の音きへてふるや寒もおもいろくつもりく雪

の上ふめる跡をへをい鳴の鷹おおそれてかくれゆく草の
影より暮そめて歸る家路の空寒く衾かつきて寐さる夜の
夢をいくとひ驚のす音いたおそす椎柴の木の實まゝりお
落さるも拾おぬ御世の此御世と鳥の初音お起出たおの
つとめをつとめほいをまある日ぬ月花の影をたつねて
遊ひほかゝる御代こそ嬉ありけれ

世中の遊ひ所ぬ月花のかけより外おあらいとそ思ふ

宜野灣朝保略傳

宜野灣朝保松風齋ト号ス文政六年沖繩首里赤平村ニ生ル
父歿スルニ及テ宜野灣間切ヲ襲領ス容貌傀偉性質豁達幼
ニシテ大度ノ聞アリ壯年ニ及テ學和漢ヲ兼子又能ク和漢
ノ語ニ通シ略英語ヲ解ス支那ニ使スル二度内地ニ使スル
六度又外國御用係等ノ職ヲ奉スルヲ以テ能ク東西ノ事情
ニ通ス安政五年命ヲ奉シテ薩州ニ赴キ公務ノ傍歌人八田
知紀樺山資雄等ニ交リ歸國ノ後別業ヲ營ミ悠然亭ト号シ
和歌ヲ其中ニ講ス其後薩人福崎季連職ニ沖繩ニ赴クニ及
テ相共ニ提携シテ益歌道ヲ擴張ス門人無慮數百人當時沖
繩和歌集前後篇成ル一時ノ盛况想フ可シ明治五年大政一
新慶賀ノ副使ト爲テ東京ニ赴クヤ

天顔ニ咫尺シ奉リ冠服等ノ恩賜アリ吹上離宮ノ御歌會ニ
陪シ御兼題當坐ヲ詠進シ 叙感ヲ蒙ル水石契久紅葉如醉
ノ二首是ナリ當時中山王ヲ改テ藩王ニ封セラル、ノ事ア
リ朝保深ク時世ノ大勢ヲ洞觀シ正使ヲ助テ速ニ朝命ヲ遵
奉ス其後支那進貢ヲ絶ツ可キ等數箇條ノ命アルニ及テ物
議沸騰爲ニ時論ノ容レサル所トナリテ終ニ要職ヲ退キ悟
性亭ヲ邸内ニ結ヒ書畫ヲ友トシ明治九年ヲ以テ五十四歳
ニシテ世ヲ辞ス其著作多ク散佚シテ傳ラス和歌數百首ノ
外詩稿數篇上京日記等ヲ存スルノミ

明治廿三年十二月五日印刷
同 年十二月十日出版

編輯兼發行者

沖繩縣士族

護 得 久 朝 置

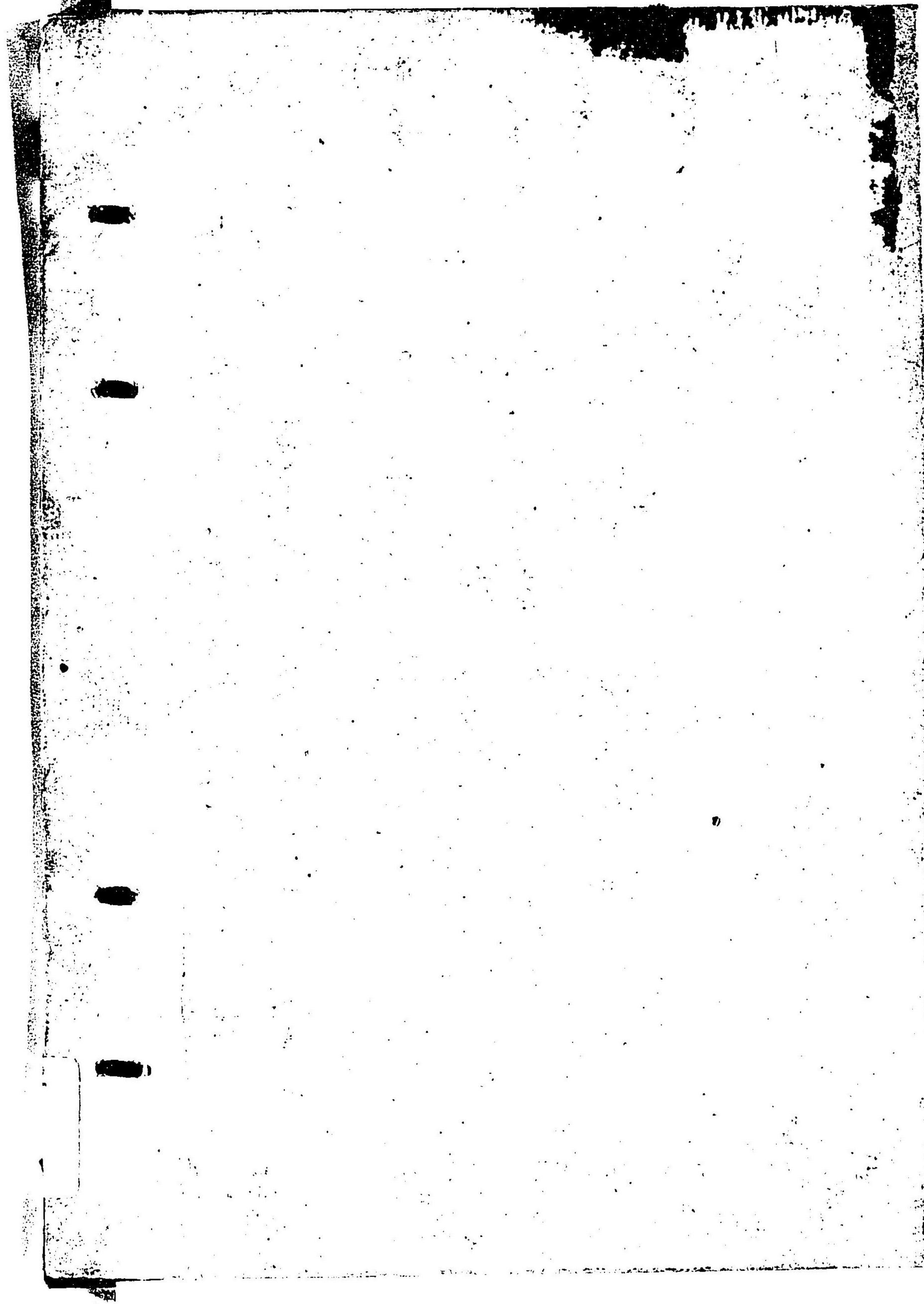
沖繩縣琉球國首里山川村
八十三番地

印刷兼發行者

東京府士族

加 藤 安 彦

東京市四谷區四谷仲町
三丁目八番地



085296-000-4

特22-906

松風集

宜野湾朝保/著

M23

DBC-0248



